

ローラ・インガルス・ワイルダーと農村教育： 『ルーラリスト』の記事とリバティ・ハイド・ベイリーの 農村生活運動の思想を比較して

高野弘子

1. はじめに

ローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) は、児童文学書である「小さな家」シリーズ (*Little House books*) を65歳になって出版する以前に、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』 (*Missouri Ruralist* 以降『ルーラリスト』と記述) の記者として44歳の時から文筆活動に携わっている。この現存する『ルーラリスト』の記事は、日記や手紙などを残していないワイルダーを知る貴重な資料である。

ワイルダーの『ルーラリスト』の記事を細かく読んでいくと、そこには、「州立大学」「循環図書館」「クラブ活動」「農産物品評会」「実験農場」といった言葉が登場する。これらは、当時、リバティ・ハイド・ベイリー (Liberty Hyde Bailey, 1858-1954) が礎を築き、各州の州立大学を中核に始められた農業普及事業に関係する用語である。この農業普及事業の基となる思想は、農村生活運動と呼ばれている。

ワイルダーと農村生活運動との関連を、2人の研究者が先行研究で指摘している。1人は、アン・ロマインズ (Ann Romines) であり、もう1人は、キャロライン・フレイザー (Caroline Fraser) である。ロマインズは、ワイルダーが、20世紀初頭にミズーリ州家庭育成協会 (Missouri Home Development Association) 及び農村婦人の世界会議 (International Congress of Farm Women) のメンバーとして、マンズフィールド (Mansfield) やその近隣の農村の女性たちのために、クラブ活動を組織し、休憩室や教室を設立した活動を行ったことについて、これらの活動は農村生活運動の一環であったと述べている (Romines 15-16)。また、フレイザーは、ワイルダーが事務長兼経理部長 (secretary-treasurer) を担当していたマンズフィールド農場融資協会 (Mansfield Farm Loan Association) の活動が、セオドア・ルーズベルト大統領 (Theodore Roosevelt) により設置された農村生活委員会 (Commission on Country Life) の推奨した農村の信用貸付事業の一環であったとしている (Fraser 239)。

しかし、ワイルダーの書いた『ルーラリスト』の記事の内容を、農村生活運動の思想と照らし合わせた研究や、農村生活運動の思想を基にアメリカ農業普及事業の礎を作ったベイリーについて言及した研究はない。これは、『ルーラリスト』の記事が、ワイルダーの伝記や「小さな家」シリーズとの関わりの中においてのみ論ぜられてきたに留まり、

農業新聞である『ルーラリスト』の記事の内容そのものを、細かく分析する研究がなされてこなかったことに由来している。

筆者は、ワイルダーの書いた『ルーラリスト』の記事の中に、前述の「州立大学」「循環図書館」「クラブ活動」「農産物品評会」「実験農場」等のキーワードを発見したことと、2人の研究者が、ワイルダーと農村生活運動について触れていることから、彼女の書いた記事は、農業普及事業を推進したベイリーの思想と関連があるのではないかと考える。ベイリーは、農村生活を向上させる鍵となるのは教育の力であると考えていた。農業普及事業とは農村教育であることから、ワイルダーの書いた記事がベイリーの思想と関連していることを明らかにすれば、『ルーラリスト』の記事を書くことを通して、ワイルダーは農村教育に貢献したと考えることができる。そしてこのことは、ワイルダー研究に、農村教育という新たな視点をもたらすことになる。したがって、本小論は、ワイルダーの『ルーラリスト』の記事とベイリーの思想である農村教育との関連を明らかにすることをその目的とする。

2. ベイリーと農村生活運動

ベイリーの農業に対する思想を示したものが、農村生活運動であり、全米レベルで農村問題に一石を投じた運動として知られている(佐々木,「L.H.ベイリー」94)。ベイリーは、彼の著書の中で、農村生活運動について、セオドア・ルーズベルト大統領の農村生活委員会の設置を発端に始まり(*Country-Life* 7)、「農村文明(rural civilization)を、他の文明と同じくらい効果的で満足のゆくものにするという願いを実現するものである」(*Country-Life* 1)と定義している。ベイリーは、当時の農村の実状について、農民は町へ移動するという一般的な傾向があるとし、すべての農民が農村に留まることは不可能であるが、この移動は、永住の地として農村は満足がいくものではないということを表していると述べている(*Report* 38)。また、過酷な農業地域において、若者がより良い条件を求めて町へと移動していること、年を取った人々も土地を貸して、生活しやすい町で快適に暮らすために、農業を引退して町へ移動していること、子どもにしっかりとした教育を受けさせるために、多くの場所で町への移動が見られることといった、農村の具体的状況を指摘している。そして、これらすべてのことが、農村を痩せさせ、農民の社会的ステータスを低くしていると述べている(*Report* 38-39)。ベイリーは、農村生活運動が、農業技術や農業の効率のための運動ではなく、本質的な農村生活の向上のためのものであり、農民はそのための知識や指導を必要としていると述べている("Some Aspects"97,103)。この農村生活運動の思想に基づいて展開されたのが農業普及事業である。

ニューヨーク州で農業普及事業を担うコーネル大学(Cornell University)は、アメリカにおいて、最も長い普及事業の歴史を有する大学であり、スミス・レバー法¹

(Smith-Lever Act) が制定される以前から、普及活動を行っていた。コーネル大学で農業普及事業を指揮したのがベイリーであり、1903年から1913年まで農学部長として普及事業の体制構築に大きな役割を果たした（農林中金総合研究所7）。ベイリーがコーネル大学の農業普及事業に携わっていた1908年、セオドア・ルーズベルト大統領は、農村生活委員会を設置し、農村にはどのような問題が存在し、何を変えていけばよいのかという調査に当たらせ、ベイリーを委員会の委員長に任命した（森岡20）。この委員会作成の報告書を受けて、スミス・レバー法が制定され、アメリカ全土での農業普及事業が確立されることとなる（農林中金総合研究所1）。

農村の関心が、農業技術の問題ではなく人間にあると考えたベイリーは、農業問題を解決する方法は農村教育にあるとし、「農業普及事業は、人々の直接的なあらゆる種類の教育的努力を意味し、離れた学校や大学へ行くことができない人々のために運営される教育的な営みである」（*Report* 126）と述べている。以上のことから、農業普及事業とは、農村教育の営みと言い換えることができる。

3. 農村教育に関わるワイルダーの記事とベイリーの思想

ワイルダーが、農業新聞『ルーラリスト』に1911年から1924年の13年間に渡って書いた記事を、具体的に見ていく。ここでは、農村生活運動の論点でもある、農業、農村女性と家、コミュニティ、及び自然の4つの観点について、ベイリーの思想と比較しながら取り上げていく。

ワイルダーの記事として、ミズーリ州立大学コロンビア校（University of Missouri-Columbia）のエリス図書館（Ellis Library）に保管されているものを、2007年にステイブン・W・ハインズ（Stephen W. Hines）が『ローラ・インガルス・ワイルダー：農場ジャーナリスト』（*Laura Ingalls Wilder: Farm Journalist*）に転記したものを用いる。ハインズは同著の註（A Note on the Text）で、「新聞を忠実に再現した」（11）と明記しており、省略もなく、年代順に記していることから、同著に収められているワイルダーの記事を、ベイリーの著作である『農村生活委員会の報告書』（*Report of the Commission on Country Life*）、『アメリカ合衆国における農村生活運動』（*The Country-Life Movement in the United State*）、『自然学習理論』（*The Nature-Study Idea*）、『農民の教育』（*The Training of Farmers*）に著されている彼の思想と比較していく。

（1）農業

ワイルダーは、1919年8月5日の記事（Hines 194-95）で、農民とその妻の仕事について触れている。農民は、鍛冶屋であり、大工であり、道路建設者であり、土木技師であり、獣医でなければならない。そして、穀物を育て、土を適切に利用し、害虫と戦い、

天候状況を克服しなければならない。さらに、農作物を的確な時期に売ることのできる、優れたビジネスマンでもなければならない。一方、農民の妻は、農作業において、頭脳と筋肉を必要な時に提供するだけでなく、料理人、パン職人、針子、洗濯屋、看護婦、部屋係のメイド、子守であるとともに、母であり、女主人の役割も果たさなければならないと説明している。

1923年11月1日の記事 (Hines 291-93) では、スイス人の友人と車で荒れたまま放置された農場の前を通り過ぎた時、彼が、「ああ、これは犯罪だ。良い土地をあんなふうには扱うのは犯罪だ」(Hines 291) と言ったことに触れ、この言葉に共鳴し、農場を荒らしてしまうことは、後世に対して盗みを犯しているのに等しいと述べている。美しい地球は人類が引き継ぐものであり、土地は生きている間、個性に応じて使わせてもらっているだけであり、前の世代から引き継いだ時よりも、より良い状態で次の世代に引き継ぐことが使命であると述べている。

これらの記事で、ワイルダーは、有能でなければ農業を営むことができないことを示し、農民の地位の向上を狙うと共に、持続可能な農業という農業のあるべき姿を人々に訴えている。

この背景には、1920年代のアメリカが、農業社会から都市社会へと移行するのに伴い、農業社会の価値観は見捨てられ、華やかな都市文化が人びとの価値観を塗り替えていった(斎藤231)という状況があった。そして、農業の黄金時代²と言われた20世紀の最初の20年間においてさえも、ほとんどの人々は、農業を高い収益を得ることのできる職業、あるいは、安定した収益を得られる職業とは考えておらず (Dambom, *Resisted Revolution* 20)、農民のステータスは低いままであった。そのような状況の中で、多くの人びとが農村を離れ、都市に働きに出る(斎藤227)ようになり、ワイルダーの記事にある通り、農地が放置されていったという実状があった。

農民の社会的ステータスの向上を願うベイリーも、彼の著書の中で、「農業は、最も高度な知識を必要とする」(*Country-Life* 28) と述べると共に、「優れた農業とは、各々の世代が、同じ土地をより良くより豊かな土地にして、後世に残していくことだ」(*Country-Life* 49) と優れた農業のあり方を説いているが、これらの農業に対する彼の思想は、ワイルダーの記事の内容と一致している。

(2) 農村女性と家

ワイルダーは、1916年3月20日の記事 (Hines 58-62) で、農村婦人に心配しすぎない生き方を指南し、毎日の生活の中の不必要なことをできるだけ排除することを勧めている。例として、パイやプリンなどの保存加工したものを作るのではなく、新鮮なフルーツはそのまま食べるのが健康的であり経済的だとし、彼女自身も野菜を缶詰めにするのをやめたと述べている。そして、もし家の一部が汚れたら、1年に1度の大掃除の時まで、ほっておくのではなく、すぐやってしまうことが良いし、窓ふきなども、元気のあ

る時に適宜やるのが良いと勧めている。また、欲しいものはリストを作り、無くてはならないものを選択すると、案外、大きな出費にはならないと述べている。農村女性の負担を軽減するための助言に溢れた記事を書いている。

また、1917年7月5日の記事（Hines 114-15）では、最初に州立大学の講演会について触れ、その後で、ワシントンにいる権威者たちが、こぞって女性と子どもたちに、農作業への参加を促していると述べている。しかし、農家の女性の実状を知るワイルダーは、もうすでに1日14時間から16時間も働いている彼女たちに、さらに労働時間を増やせと言うのかと反論している。また、都市では子どもや女性の労働時間を1日8時間にしようという運動が進んでいるのに対し、農村の女性たちには代表者がいないため、それと同じことがなされていないことに対して、憤りを示している。

この背景には、夫の様に手伝いの手を得ることのできない農村女性にとって、農村生活は厳しいものであり、都市では便利な器具が普及しているのに対し、農村の女性は、相変わらず、祖母の使っていた用具を使い、重労働を背負っていたという状況があった（Danbom, *Resisted Revolution* 5-6）。農村の妻たちは農村家族の土台であり、農村家族は農村社会の土台であるため、彼女たちの不満が懸念されていた。なぜなら、もし、農村女性が落胆し、農村の少女が農場の少年と結婚することをやめれば、アメリカの農業は崩壊の危機に直面すると考えられていたからである（Danbom, *Resisted Revolution* 62）。このため、農村女性の労働を軽減するために、農村の人々が、セントラルヒーティングや、ミシン、冷蔵庫、オーブン、電気、水道のような家財を獲得することや（Danbom, *Resisted Revolution* 62）農村女性が、もっと能率よく掃除したり、家計簿を付けたり、単純な料理を作ったり、コミュニティーの洗濯に参加したりすることによって、過酷な仕事を平易にすることが奨励された（Danbom, *Resisted Revolution* 62）。しかし、1910年代、大きな物質的進歩を見たにもかかわらず、1920年の国勢調査は、620万1,261人の農民の内、わずか10%の家が水道を持ち、7%がガスあるいは電気の明かりを持つにすぎなかったことを示している。1920年までに都市の労働者階級が必要とした最小限の快適さは、農村の大多数の家庭では、手の届かない贅沢であったという実状であった（Danbom, *Resisted Revolution* 122）。

このため、ワイルダーは記事を通して、農村女性たちの実生活の助けになる具体的なアドバイスを与えながら、彼女たちへの援助の手が必要であることを訴えている。

ベイリーも、「農村女性の救済は、農村生活の全体の向上を通してなされなければならない、農村女性にはさらなる援助が必要である」（*Report* 105）と述べ、農村女性たちにもっと援助の手を差し伸べるべきであると訴えている。

また、ワイルダーは家に関して、1923年1月15日の記事（Hines 282-85）で、フレッド・オティング（Fred Oetting）農場は訪問するのに楽しい場所であると紹介している。そして、その理由を、気持ちの良い友情で訪問者を迎えてくれるからであるとしている。

オティング夫妻は息子や娘たちと仕事を協力し、また農場の収入を分かち合っており、それは、農場の良い運営方法であると述べている。子どもたちは、鶏の卵を集められるようになったときから、農場の収入の分け前をもらっている。そして、成長した2人の男の子は養豚の共同事業者として家の農場で働いており、慈善の心と同じように協力の心は家から始まり、家族農場は未来の農場の船出であることをオティング農場から学んだと、この記事をもとめている。

1923年8月1日の記事(Hines 290-91)では、牧草地で野生の向日葵を摘んで、その花の中心を眺めた時、父、母、姉妹のことを思い出して、ホームシックになりすすり泣いたと書き出している。人生を生きてきて、子ども時代はワイルダーに大きな影響を与えていたことや、両親はワイルダーが続くべき手本であったことが述べられている。そして、両親は彼女にとって、いつもよりどころとする羅針盤の針のようであったと書いている。世の中がどんなに変わろうとも家庭をないがしろにすることはできない。良心の強さは社会の進歩や娯楽からくるのではなく、昔ながらの家庭の静かな時間と家族の声に由来していると述べ、美しい野生の向日葵のように、人生の大切な価値は、平凡なものの中にあるとまとめている。

以上のように、ワイルダーは、記事の中で、自らの経験及び近隣住民の経験を紹介しながら、家族農場が未来の農場の船出であることや、良心の強さは昔ながらの家庭の静かな時間と家族の声に由来していることなど、家の持つ重要性を読者に訴えている。

ベイリーも、農場の家は農業の最も重要な教育の場であるとしている(*Training*23)。また、『農村生活委員会の報告書』の中で、「国家の生活に影響すると判断される人間として、農村婦人より重要なものはおらず、また、農村の家よりも重要な家は他にないから、農村婦人と農村の家のためにできる限りのことをすることは、国家的な重要性を持っている」(*Report* 44)とするセオドア・ルーズベルト大統領の言葉を引用し、農村女性と農村の家への援助が国家的な課題であることを示している。この背景には、都市において、家族の崩壊が出現している一方で、農村では男女及び親子の道徳的に正当な関係が存続していたという実状があった(Danbom, *Resisted Revolution* 26)。このためベイリーは、農場の家が国民の質の保持と道徳の維持の役目を担っていると述べている(*Training* 71)。

(3) コミュニティーについて

ワイルダーは、1917年5月20日の記事(Hines 109-10)で、最初に家の近所に空き家が2軒あることを述べ、持ち主は、新しい冒険へと出発していき、寂しい気持ちになったと綴っている。ある人は、近所の人を嫌いだから、他の場所に移ったのだが、その人は、別の新しい場所に行っても、また同じ問題に出会うだろうと述べている。その後で、2人の隣人について触れている。物の貸し借りで不快な思いをしたことのある隣人ではあったが、本当に助けが必要な時、その隣人はワイルダー一家にとって大きな支えとなっ

たことが紹介されている。それに対して、他の州から移ってきたスミス（Smith）氏は、近隣の人々と交流しようとはしなかったことを紹介し、近隣の住民もその意思を尊重したと述べている。しかし、結局のところスミス氏は、作物をうまく育てることができなかった。彼は隣人の親切な助言を受けるチャンスを持たなかったことが原因したと紹介している。

また、1918年4月20日の記事（Hines 144-45）では、未亡人となったセルズ（Sells）夫人が、自ら生計を立てるために養鶏を始めたのだが、近所の人々がそれを助けたことを記している。また、アシュトン（Ashton）は、病気のために燕麦を育てることができなかったが、それを近所の人々が助けたことが紹介されている。助力の精神と仲間関係は人々の心を動かすと述べ、誰かの仕事はみんなの仕事であるとまとめている。

1922年3月1日の記事（Hines 266）でワイルダーは、自らが住むオザーク（Ozark）が少し時代遅れの場所であると思うと述べ、しかしそのことは尊いことで、未だに近所は助け合っていると書いている。そして、新しくオザークに移住してきた人が、「私はここに住むことを誇りに思う、なぜなら、近所の人が必要な時に助け合うということが分かったからだ」（Hines 266）と言ったことを紹介している。

以上のように、ワイルダーはコミュニティーの協力の重要性を読者に伝えるために、身近な話題や実例を新聞記事の中で提供している。

一方、ベイリーは、農民はまだ、効果的に共に働く方法を学んでいないと述べている（*Training* 69）。そして、同じ種類の農業を営む農民は協力者というよりは、競争者という意識を持っているが、近隣の農民が同じ作物を育てることで、コミュニティーとしてその作物の評判を高めることができ、買い手を引きつけることを可能にすると述べている。また、コミュニティーの協力で、輸送費も軽減することができ、同じ作物への共通の興味はコミュニティーに専門家の知識をもたらすとしている（*Training* 69）。そして、「コミュニティーのプライドは、良い生産物を生み、共通の精神を培う」（*Country-Life* 133）としている。2人は共に農村におけるコミュニティーの重要性を訴えているが、ワイルダーは、コミュニティーにおける個々の農民のあり方を、ベイリーは、地域全体の発展という視点からそのあり方を提言している。

また、ワイルダーは記事の中で、コミュニティー活動のひとつであるクラブ活動の具体的な活動内容を紹介している。1916年8月5日の記事（Hines 77-78）では、マンズフィールド少年クラブ（Mansfield Boys Good Roads Club）について書いている。900人の人口の小さい町であるマンズフィールドだが、50人の少年たちで構成されているこのクラブの会員は、マンズフィールドの公道を整えるために作業したこと、家族が昼食を運び、ビジネスをする大人たちが作業のためのつるはしやシャベルを提供したことを紹介している。少年たちは、空いている時間をいたずらや無駄に使うのではなく、健康的でコミュニティーのためになる作業をし、彼らの活動は彼らに良い行動の必要性と、

コミュニティーの所有物に対する尊敬を教えたとしている。そして、公共物に対するこの興味は、将来この少年たちの公共心を養い、聡明な市民となることの大きな援助になるとまとめている。

ワイルダーは、女性のクラブ活動についての記事も複数回書いている。1916年5月5日の記事(Hines 68-71)には、自らも創設者のメンバーの一人である、アシニアンクラブ(Athenian Club)について書いている。ハートビル(Hartville)の女性は、刺繍のクラブや教会の助け合いの集まりなどに参加していたが、知識を増やし、精神を豊かにしたいと願い、年間計画を立てた勉強会を始め、これがアシニアンクラブであると説明している。町の住人であれ、農村の住人であれ、女性の文学や世界についての知識を得たいという願いは同じである。だから、一緒に勉強して互いを理解できたら、世界はもっと心地よいものになると述べ、町の女性と農村の女性が、クラブ活動と一緒に参加することを勧めている。

さらに、1924年4月1日の記事(Hines 307-08)では、クラブ活動で音楽を学んだことを書いており、学ぶことは最も魅力的なことで、学び続けることは人生に喜びを添えるとまとめており、自らの経験を紹介している。ワイルダーは、農作業や家事に追われ、孤独になりがちな農村女性が、クラブ活動へ参加することで、仲間と共に知識や教養を身に付けることを推奨していることがわかる。

以上のように、ワイルダーは、ミズーリ州で行われている様々な種類のクラブ活動を読者に分かり易いように、具体的に紹介しており、クラブ活動の参加を促す意図があったと考えられる。

一方、ベイリーは、コミュニティー活動の延長にある女性のクラブ活動への参加について、「すべての農村女性が少なくとも、1週間に1度は、町に農作物を売りに行く以外に、家を離れる手段と理由を持つことが重要である。そして、農村女性が日常生活の日々の雑事から離れ、異なった仲間と集まることのできる場所が用意されるべきだ」(Country-Life 91-92)と述べ、農村女性は、家庭の中に閉じこもるのではなく、家を離れる時間を作り、自らの世界を広げる機会を持つことが必要であるとしている(Report 106)。

この背景には、1923年の時点においてさえ、町からほんの3マイルしか離れていない場所に住む農村女性が、1年間、他の女性と全く会う機会を持たなかったという事例に代表される孤独な農村女性の実状があった(Danbom, *Resisted Revolution* 10)。

また、ワイルダーは、1924年1月15日の記事(Hines 300-02)で、ハートビルにある高校で開かれた品評会のことを詳細に記している。様々な品評会に参加した経験を持つワイルダーであるが、この品評会は極めて重要であると考えている。生徒同士の協力と競争は、子どもたちが国家の、そして世界の良い市民となることに役立つと述べている。この品評会は子どもたちのものであり、子どもたちによって子どもたちのために開催さ

れたと紹介している。具体的に、それぞれの高校の展示物について触れ、ニュー・マウンテン・デール（New Mountain Dale）高校は、44種類の缶詰のフルーツを展示したこと、ロジャーズ・スクール（Rodgers School）は15種類の牧草と、78種類の天然木を展示したこと、ホール・スクール（Hall School）は18種類の森の木の葉を展示したこと、リトル・クリーク・スクール（Little Creek School）は27種類の森の葉と、21種類の穀物、22種類の種、14種類の昆虫、10種類の有毒な雑草、70種類の天然木を展示したこと、プレザント・ヒル・スクール（Pleasant Hill School）はカブ、カボチャ、ジャガイモ、メロン、穀物、牧草、雑草、ロープの結び方、農業地図、パッチワーク、鉢植え、37種類の缶詰のフルーツ、11種類のリンゴ、部屋いっぱいの鶏、一匹の子牛と、2つの豚小屋を展示したことなど、展示物を詳しく紹介している。そして、学校の授業の展示物や、健康、農業、養鶏、酪農に関する展示物が強調された品評会であったと報告している。

一方ベイリーは、コミュニティー活動の延長である農産物品評会の理想的な在り方について、「私は、農産物品評会が、農村の人々にとって真の出会いの場所であることを望んでいる。特に、子どもたちに向けて特別な努力をはかりたいと思う。農産物品評会において、農業機械や家畜は大事だけれども、最も大切なのは人間である。私は、農産物品評会を、1つの大きなピクニックであり集会の場であり野外研究日としたい、そして、農村生活の発展に関わる最も優れた要素を持ち寄る場としたい」（*Country-Life* 169）と述べている。ベイリーは、農産物品評会が、農民にとって自分たちの生活をより良いものにして行くための集いとなり、また、子どもたちにとっても学びの場となることを望んでいたことがわかる。ワイルダーが記事で紹介した品評会は、ベイリーが望んでいた教育的な農産物品評会であった。

（4）自然

ワイルダーは、1916年10月20日の記事（Hines 87-88）で、秋の美しい日の光景について触れ、どんな素晴らしい画家も、この自然の美しさをそのまま再現することはできないだろうと述べている。家の居間にある3枚のカーテンの付いていない窓を、ワイルダーは、私の絵と呼んでいる。人々は、自然の美しさを十分味わうことなく、毎日忙しく暮らしている。しかし、私たちのためでなくて、どうして自然はこんなに美しいのか。いずれはこの世界を私たちは去っていく、それなのにどうしてそんなに急がなければいけないのか。人生の本当の楽しみ方は、過ぎ去っていく刻一刻を楽しむことであり、私たちの周りがあるささやかなことの中に、人生の美は横たわっているとまとめている。

また、1917年7月20日の記事（Hines 118-19）では、夫であるアルマンゾ（Almanzo Wilder, 1857-1949）が、朝、野の花の花束をくれたことを書いている。アルマンゾはいつも、買って来た花ではなくて、野の花の花束をくれることが示され、また、ワイルダー自身も野の花の花束の方が美しいと思うと述べている。そして、ワイルダーは、本物というのは、人生の中の快い単純な物の中にあるということを知り始めていると書いてい

る。「太陽の下には新しいものはない」(Hines 119)ということわざがあるが、その意味は、人生の真実とか人生の法則は、どんなに文明が発達しようとも、人々の暮らしがどんなに複雑になろうとも変わらないということであると述べている。だから、シンプルな生活、直接的な考えが幸せにつながると思うと述べている。そして、心地よいこと、例えば愛、義務、労働、できるだけ自然のそばに暮らすことなどの基本的なことが、人生を価値あるものにしてしていると述べ、温室の花より野の花が美しいとまとめている。

これらの記事でワイルダーは、農村生活の最大の魅力は自然と共に生活できること、シンプルな生活や直接的な考えが幸せにつながることを説いている。

一方ベイリーは、「自然資源を評価する際に、風景の価値を忘れてはならない。これは明確な財産であり、時間が経てば経つほど、もっと正当なものとして認められるであろう。あらゆる風景の美しさを保護し、人々にその点についての真価を認めることを陶冶すること無しに、農村生活の満足感を育成することは不可能である」(*Country-Life* 207)と述べ、農村生活は、何物にも代えがたい景色の美しさを持つことを指摘している。また、彼の教育哲学書である『自然学習理論』の中で、自然への愛は、生活の簡素化に向かい、農村生活へ向かわせると述べている (*Nature* 52)。そして、良い農民は良い自然主義者であるとしている (*Nature* 95-96)。ワイルダーの自然観察の記事は、彼女が良い自然主義者であることを示し、また、シンプルな生活、直接的な考えが幸せにつながるという彼女の考え方は、ベイリーの自然への愛は生活の簡素化へ向かうという考え方と一致をみる。

これまで、ワイルダーの書いた『ルーラリスト』の記事を、農業、農村女性と家、コミュニティ、自然という4つの観点から分析してきた。そして、これらの観点に関する記事のすべてにおいて、ベイリーの農村教育の思想と、大きな重なりを持っていることが明確となった。

ベイリーは、前述の通り「農業普及事業は、人々の直接的なあらゆる種類の教育的努力を意味し、離れた学校や大学へ行くことが出来ない人々のために運営される教育的な営みである」(*Report* 126)としていることから、『ルーラリスト』の記事を発信することを通して、ワイルダーは、読者に農村生活が向上するための教育的援助、つまり農村教育を施したと考えることができる。

4. ワイルダーと農業普及事業

ワイルダーは、『ルーラリスト』の記事を書く傍ら、前に述べた通り、農村女性のクラブであるアシニアンクラブやジャスタミアクラブ (Justamere Club) を州立大学の読書コースからの援助を受けながら創設している。また、農村の生活を向上させるために設立されたミズーリ家庭育成協会でも、積極的に活動している。さらに、金銭面で苦し

む農民たちが、安く資金を借りられるようにと農場融資協会のマンスフィールド支部の設立を援助し、事務長兼経理部長となり、コミュニティーの中で日々活動していた。この融資協会は、1916年の連邦農場融資法（The Federal Farm Loan Act）の基に作られ、農民が安い利率で融資を受けられるようにと設立された。結婚当初のワイルダー夫妻は、ダコタテリトリー（Dakota Territory）で農業を始めるにあたり、農業機械を購入したり、家を建てたりするために銀行から融資を受けたが、高い金利と、返済期間の短さに苦しめられた苦い経験を持っていた。農場融資協会は、農民のみが会員になれば、政府の援助により、金利が低く抑えられていることに加えて、返済期間も長く設定されている。この農場融資協会は、農民のために、農民によって運営され、会員の中から会長、副会長、融資委員、事務長兼経理部長が構成されていた（The Federal Farm Loan Board 3-8）。実務を行うのは、事務長兼経理部長であり、ワイルダーはこの協会の支部において、要となる役割を担い、地域の農民のために貢献していた。

1910年代から1920年代に、連邦政府は、農村生活の質を向上させることに注意を払っていた。これは、農村生活の安定が、アメリカの発展の基盤であるという信念からであった。セオドア・ルーズベルト大統領が、農村生活委員会を立ち上げ、調査を命じたのも、アメリカの偉大さは農民階級を基盤とする農本主義にあると信じていたことにあった（Jellison 2）。この農本主義の最大の支持者たちは、農村女性の状況を変えることを含む農村の改革を訴える中西部の編集者やジャーナリストであり、彼らの多くは農村生活運動のリーダーであった（Jellison 2, 187）。

『ルーラリスト』の編集長であったジョン・F・ケース（John F. Case）は、同新聞の1918年2月の記事で、記者であるワイルダーについての紹介文を書いている。その記事の中でケースは、ワイルダーが、農村の人々の抱える問題をよく理解しており、彼らに共感の気持ちを持って記事を書いていること、コミュニティーがより良くなるために真心を持って様々な活動に取り組んでいること、地域の住民は彼女のことを誇りに思っていることを記している（Ozarks 21-23）。

ベイリーは、「農村の新しい指導者は、農場での仕事に満足を得ることができるばかりでなく、コミュニティーを作り上げるといふ奉仕に身を投じることのできる農民である」（Ziegler 20-21）と述べているが、農民の妻として夫の片腕となって農場を営むと共に、コミュニティーのための様々な活動に取り組んだワイルダーは、ベイリーの定義する農村の指導者に当てはまっており、地域における農村生活運動のリーダーの1人であったと考えることができる。

5. おわりに

ワイルダーとベイリーは、生きた時代と生い立ちが非常によく似ている。ベイリーは1858年にミシガン州のサウス・ヘブーンに、開拓農民の三男として生まれ、中西部的な独

立自営農民としての価値観を身に付けながら育ち、1954年に亡くなっている³。一方、ワイルダーも、1867年に中西部の開拓農民の次女として生まれ、中西部の独立自営農民の価値観と共に育ち、1957年に亡くなっている⁴。つまり、ベイリーとワイルダーは、同じ時代を生きていた。そして2人は共に農村を心から愛していた。

さらに、ベイリーは大学で農業科目を教え、ワイルダーも短期間であるが、学校で教師の仕事をしており、2人は教員の経験を共有している。特に、ベイリーは、教育学者としても著名であり、独自の教育哲学である子どものための「自然学習」の理論を構築した。また、ワイルダーも、『ルーラリスト』の中に、前述のマンズフィールド少年クラブや高校での農産物品評会の活動を讃える記事を書く一方で、子どもたちの様子を危惧する内容の記事も複数書いており、青少年の教育に対して高い関心を持っていた。

また、ワイルダーと同様にベイリーも2年間ほど新聞記者として活動した時期があり、記者という共通した職業に携わった経験を持っていた。ベイリーは、記者をしていた経験から、農業の普及活動において、新聞には大きな役割があることを、「地域の実状を知る地方新聞は、コミュニティーの活動を進展させることにおいて強力な影響力を持っており、各地域の農村生活を向上させるための機関とみなすべきである」(*Country-Life* 123)と述べている。また、ベイリーは、農業新聞が広範囲に渡って農民に読む習慣を培い、今日的话题を提供しているとしている。そして、農業技術よりはむしろ、農場生活における共感的で精神的な問題について扱う新しいタイプの一流の新聞を必要としていると述べている (*Training* 42)。ワイルダーの記事の内容は、農場生活における共感的で精神的な問題を扱っていることから、彼女は、ベイリーが求めていた新しいタイプの農業新聞の記事を提供していたと考えることができる。

様々な側面で、共通の経験を持つ2人は、農村生活の向上を強く願っていた。ベイリーは、農村教育こそが農村生活の向上を成し遂げる唯一の方法と考え、農業普及事業を展開していった。一方ワイルダーは、農業普及事業が展開されていく中であって、農業新聞の記事を書くことを通して、農村生活が少しでも向上するための情報提供やアドバイスを行っており、これは農民に向けての農村教育であったと言える。

ベイリーは『農村生活委員会の報告書』の中で、「どうやったら農場の家族の人生を、より孤立させず、よりチャンスを持たせ、骨の折れる単調な仕事から解放し、より快適で幸せで魅力的にすることが出来るのか。・・・どうやったら、農場での生活が、最も高いレベルの生活水準を維持でき、農場の少年少女、妻、そして農夫自身のプライドや忠誠心を呼び起こすことができるのだろうか。どうやったら農場で生まれた子どもたちに農場で暮らしたいと望ませることが出来るのだろうか。これらすべての問いは、農民だけでなく、全国民にとってきわめて重要である」(*Report* 43-44)というセオドア・ルーズベルト大統領が彼に宛てて書いた手紙を引用している。ベイリーとワイルダーは共に、この問いの答えを農村教育に求めた。

ワイルダーが『ルーラリスト』の記事を書くことを通して、農村教育に貢献したとい

う事実は、数年後に発表される「小さな家」シリーズにもその影響が波及していると考えられる。今後は、児童文学書である「小さな家」シリーズ⁵も含め、ワイルダーを、農村教育という新しい視点から再評価することを試みていきたい。

（たかの ひろこ・高崎経済大学非常勤講師）

注

- 1 アメリカ農業において、1862年は、その後の農業の発展の基礎となる3つの法律が制定された重要な年である。農務省設置法(Act to Establish a Department of Agriculture)により、農務省が設置され、ホームステッド法(Homestead Act)により、開拓者への土地の無償譲渡が行われ、モリル法(Morrill Act)により、州立大学が設置された。その後、1887年に制定されたハッチ法(Hatch Act)により、州立大学の中に農事試験場の設置が進んだ。そして、ワイルダーが『ルーラリスト』の記事を書いていた1914年には、スミス・レバー法が制定され、州立大学を中核とする農業普及制度が確立した。(農林中金総合研究所1)
- 2 20世紀に入り、アメリカ農業は、未曾有の好景気を迎え、一般に、1900年から1915年を農業の「黄金時代」、1915年から1918年までを「極楽時代」と呼んでいる。この時代には、移民による人口増加、鉱工業の繁栄による農産物消費の増大に伴う国内需要の増加、第一次世界大戦(1914-1918)による国外からの需要の増加などにより、農業ブームが起きる。このブームにのって、土地投機が広まり、農業機械の導入が急激に行われた。しかし、1919年には、事態は一変し農業恐慌が始まる。その原因としては、戦前から戦中にかけて続いた農産物の増産体制が戦後の需要にまで縮小することが出来ず、過剰生産に陥ったこと、農業革命により化学肥料の使用やトラクターなどの大型農業機械の導入により収穫量が増大し、過剰生産に拍車がかかったことが挙げられる。また、戦後は、ヨーロッパで高関税政策がとられたこと、カナダ、アルゼンチン、オーストラリアなどの小麦輸出がアメリカと競争するようになったことも農産物の余剰に影響を与えた。この為、アメリカ農業は、1923年から25年までの間、多少の小康状態を保ったが、その後は一層強硬な恐慌に突入していった。(木内・市橋 64-65)
- 3 ベイリーは、1858年3月15日、ミシガン州(Michigan)、サウス・ヘブン(South Haven)に開拓農民の三男として生まれた。1877年から1882年まで、ミシガン農業大学(Michigan Agricultural College)に在籍し植物学を学ぶ。1882年から1883年まで、イリノイ州(Illinois)スプリングフィールド(Springfield)で『モーニング・モニター』誌(*Morning Monitor*)の記者として働いたが、その後、ハーバード大学(Harvard University)の植物学者アサ・グレイ(Asa Gray)の助手として働くようになり、1885年から、ミシガン農業大学の園芸学の教授となる。1887年から、コーネル大学に招かれ、いくつかの授業を担当するようになり、1889年から、同大学で正式に教え始め、1890年代には同大学で農業普及活動を開始する。そして、1903年に、根底に子どもたちに農村を愛することを教えるという考え方が流れている教育書である『自然学習理論』を出版する。1904年から1913年にかけて、コーネル大学農学部で植物病理学、栽培学、農業経済学、農場経営学、実験植物生物学、農業工学、家庭経済学といった様々な部門を確立する。1908年、セオドア・ルーズベルト大統領に、農村生活委員会の委員長として、アメリカ合衆国の農村生活の状況を調査することを要望され、その後、アメリカ農業普及事業の礎を作り、農村生活の改善に尽力した。("Liberty Hyde Bailey: A Man for All Seasons.")
- 4 ワイルダーは、1867年ウィスコンシン州ペピン(Wisconsin, Pepin)で、開拓農民の父チャールズ・インガルス(Charles Ingalls, 1836-1902)と母キャロライン・インガルス(Caroline Ingalls, 1889-1924)の次女として生まれ、西部開拓時代の真ただ中を、農民の子どもとして育った。15歳の時、教員免許状を得て、数年間、開拓地で教職に就く。その後、1875年、ニューヨーク州(New York)出身の開拓農民であるアルマンゾ・ワイルダーとダコタテリトリーで結婚し、農民の妻となった。結婚当初のワイルダー夫妻は、ダコタテリトリーで農業を営むが、天候不順や、アルマンゾがジフテリアの後遺症に苦しむなどの不運が続き、借金返済ができなくなり、ホームステッド(Homestead)を手放すことになる。様々な紆余曲折を経て、ワイルダー夫妻は娘のローズ・ワイルダー・レイン(Rose Wilder Lane, 1886-1968)

を連れて、ワイルダーが針子として働いた資金を基に、農民としての再起をかけてミズーリ州へ移住し、そこで、ロッキー・リッジ (Rocky Ridge) と名付けた農場を営み、永住の地とした。(Zochert, *Laura*)

ロッキー・リッジ農場で、ワイルダー夫妻は、それぞれの得意分野を持った。ワイルダーはレグホーン (Leghorn) という品種の養鶏に、アルマンゾはジャージー (Jersey) という品種の養牛に力を注いだ。その結果、ワイルダーは、地域でも有名な養鶏家となり、様々な会合で養鶏についてのスピーチを求められるようになった。ある時、都合でスピーチに行けなくなったことから、ワイルダーは、主催者に原稿を送り、それを代読してもらうという方法をとった。そこに偶然居合わせたのが、農業新聞『ルーラリスト』の編集長のケースであった。ワイルダーの原稿に感銘を受けたケースは、彼女に『ルーラリスト』への投稿を促した。このことがきっかけとなり、ワイルダーは『ルーラリスト』の記事を書き始め、数年後には、コラムも担当し、1911年から1924年までの13年間、『ルーラリスト』の記者として記事を書き続けた。(Miller 114-15, 128-29)

ロッキー・リッジ農場で夫アルマンゾと共に農業を営む傍ら、ワイルダーは農業新聞を書くことになるが、その他にも、女性のためのクラブ活動であるアシニアンクラブやジャスタミアクラブを創設し、ミズーリ家庭育成協会でも積極的に活動した。また、農業融資協会の事務局長兼経理部長 (1917-1927) となった。しかし、1929年に大恐慌が起き、農業も大打撃を受ける。当時ジャーナリストとして活動していた娘レインも、投資していた株をすべて失い、仕事も大幅に減り、経済的苦境に立たされた。そこで、母親であるワイルダーに、子どもの頃よく話してくれた物語を本にしてはどうかと持ちかけ、それが、「小さな家」シリーズとなっていく。一方、夫アルマンゾは、亡くなる直前まで規模は縮小しつつ農業を営み続けた。(Anderson, *A Biography*)

- 5 アメリカ図書館協会 (American Library Association, ALA) とアメリカ図書館協会の児童サービス部 (Association for Library Service to Children, ALSC) は連名で2018年6月に、1954年以来、アメリカで出版され、時代を超えて、児童文学に寄与してきた本に贈られるローラ・インガルス・ワイルダー賞 (The Laura Ingalls Wilder Award) の名称を児童文学遺産賞 (Children's Literature Legacy Award) と改名することを発表した (ALA news)。ローラ・インガルス・ワイルダー賞は、1954年にワイルダー自身が受賞したことに始まり、1970年にはE・B・ホワイト (E. B. White)、1983年にはモーリス・センダック (Maurice Sendak)、1995年にはヴァージニア・ハミルトン (Virginia Hamilton) などが受賞している。1954年から1980年は5年おきに、1983年から2001年までは3年おきに、2003年から2015年までは2年おきに、2016年からは1年ごとに賞が贈られていた。名称の変更の理由は、「ワイルダーの作品は児童文学史上、また個々の読者にとっても大変意義深いものであるとした上で、ワイルダーの作品は自身の人生経験や1800年代当時の開拓移民としての視点を基に書かれており、現代の価値観から見ると人種差別的な表現が含まれていることから、人種や思想を超えた包摂性や統合、互いへの敬意や配慮といったALSCの根幹をなす価値観に鑑み、改称に至った」と説明している (国際子ども図書館、ローラ・インガルス・ワイルダー賞の名称変更)。

本小論の中心資料であるワイルダーの書いた『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の中には、人種差別的な表現は見受けられない。これは、『ルーラリスト』が農業新聞であり、ジャーナリズムの立場で書かれているためであると考えられる。しかし、ワイルダー研究において、「小さな家」シリーズにおけるネイティブアメリカンは大きな議論の対象である。

「小さな家」シリーズ第3巻『大草原の小さな家』 (*Little House on the Prairie*) は、1935年に出版された。それから18年経った1952年に読者から、『大草原の小さな家』を出版したハーバー社 (Harper & Brothers) に、作品中の表現に対する抗議の手紙が届いた。指摘のあった箇所は、第1章のオープニングの部分であり、“There the wild animals wandered and fed as though they were in a pasture that stretched much farther than a man could see, and there were no people. Only Indians lived there.” (Hill 190) と表現されている。問題とされたのは、大草原には「人々はおらず、インディアンだけがそこに住んでいた」という表現である。当時、ハーバー社の児童文学部門の編集長をしていたウルスラ・ノードストローム (Ursula Nordstrom) は、この読者の手紙と彼女の見解をワイルダーに郵送した (Marcus 53-55)。ノードストロームから報告を受けたワイルダーは、“You are perfectly right about the fault in ‘Little House on the Prairie’ and have my permission to make the correction as you suggest. It was a stupid blunder of mine. Of course Indians are people and I did not intend to imply they were not.”

(Anderson, *Selected Letters* 343) と返信し、インディアンはもちろん人々であり、私の愚かで不注意な間違いであったと述べ、『大草原の小さな家』の改訂に同意している。改訂された本文は、“There the wild animals wandered and fed as though they were in a pasture that stretched much farther than a man could see, and there were no settlers. Only Indians lived there.” (2) となり、“no people”が“no settlers”と修正されている。この事例から、ワイルダーは意図的に人種差別的表現を使ったのではないと考えることができるが、農村教育という視点から、「小さな家」シリーズにおけるネイティブアメリカンの表現についても考えていきたい。

参考文献

- ALA news. 2018. “ALA, ALSC respond to Wilder Medal name change.” 1 Dec. 2019. <www.ala.org/news/press-releases/2018/06/ala-alsc-respond-wilder-medal-name-change>
- Anderson, William. ed. *A Little House Sampler: A Collection of Early Stories and Reminiscences*. U of Nebraska P, 1988.
- , ed. *A Little House Reader: A Collection of Writings by Laura Ingalls Wilder*. New York: HarperCollins, 1998.
- . *Laura Ingalls Wilder: A Biography*. New York: HarperCollins, 1992.
- . *Laura's Rose: The Story of Rose Wilder Lane*. De Smet, South Dakota: Laura Ingalls Wilder Memorial Society, 1976.
- . *Laura Wilder of Mansfield*. 1968. De Smet, South Dakota: Laura Ingalls Wilder Memorial Society, 1974.
- , ed. *The Selected Letters of Laura Ingalls Wilder*. New York: Harper Collins, 2016.
- Bailey, Liberty Hyde, ed. *Cyclopedia of American Agriculture: A Popular Survey of Agricultural Conditions, Practices and Ideals in the United States and Canada*. Vol. IV – Farm and Community, London: Macmillan, 1910.
- . *Report of the Commission on Country Life*. New York: Macmillan, 1917.
- . “Some Aspects of the Country-Life Movement.” *The North Carolina High School Bulletin*. Vol. 5, No. 3, 1914.
- . *The Country-Life Movement in the United States*. New York: Macmillan, 1911.
- . *The Training of Farmers*. New York: Macmillan, 1909.
- Cornell University Library Website. 2004. “Liberty Hyde Bailey: A Man for All Seasons.” Division of Rare & Manuscript Collections. 20 Aug. 2019. <<https://rmc.library.cornell.edu/bailey/introduction/index.html>>
- Danbom, David B. “Romantic Agrarianism in Twentieth-Century America.” *Agricultural History*. Vol. 65, No.4, 1991.
- . “Rural Education Reform and the Country Life Movement, 1900-1920.” *Agricultural History*. Vol. 53, No. 2, 1979.
- . *The Resisted Revolution: Urban America and the Industrialization of Agriculture, 1900 – 1930*. The Iowa State University Press, 1979.
- Ellsworth, Clayton S. “Theodore Roosevelt’s Country Life Commission.” *Agricultural History* Vol. 34, No. 4, 1960.
- Ford, Carin T. *Laura Ingalls Wilder: Real-Life Pioneer of the Little House Books*. Berkeley Heights, NJ: Enslow, 2003.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*. Pierre: South Dakota Historical Society Press, 2017.
- Hill, Pamela Smith. *Laura Ingalls Wilder: A Writer's Life*. South Dakota State Historical Society Press, 2007.
- Hines, Stephen W. *Little House in the Ozarks: A Laura Ingalls Wilder Sampler The Rediscovered Writings*. Nashville, Tennessee: Tommy Nelson, 1991.
- . *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist*. University of Missouri Press, 2007.

- . *Writings to Young Women from Laura Ingalls Wilder: On Life as a Pioneer Woman*. Nashville, Tennessee: Tommy Nelson, 2006.
- Holtz, William. *The Ghost in the Little House: A Life of Rose Wilder Lane*. Columbia, Missouri: U of Missouri P, 1993.
- Jellison, Katherine. *Entitled to Power: Farm Women and Technology, 1913-1963*. Chapel Hill: U of North Carolina Press, 2017.
- Marcus, Leonard S., ed. *Dear Genius: The Letters of Ursula Nordstrom*. New York: HarperCollins, 1998.
- McClure, Wendy. *The Wilder Life*. New York: Riverhead, 2011.
- Miller, John E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman Behind the Legend*. Columbia, MO: U of Missouri Press, 1998.
- Romines, Ann. *Constructing the Little House: Gender, Culture, and Laura Ingalls Wilder*. Amherst: U of Massachusetts P, 1997.
- The Federal Farm Loan Board. "How Farmers May Form A National Farm Loan Association." Washington: Treasury Department Federal Farm Loan Bureau, *Circular* No. 2, 1921.
- . "The Federal Farm Loan Act." Washington: Treasury Department Federal Farm Loan Bureau, *Circular* No. 4, 1916.
- Wilder, Laura Ingalls. *Little House on the Prairie*. 1935. New York: HarperCollins, 2004.
- Ziegler, Edith M. "Country Lifers and the Meaning of Community: Parsing Community in the Text of the Report of Theodore Roosevelt's 1908 Commission on Country Life." *Kettering Foundation Working Paper*, 2010.
- Zochert, Donald. *Laura: The Life of Laura Ingalls Wilder*. New York: HarperCollins, 1976.
- 宇佐美寛「L・H・ベイリーの「自然学習」－アメリカ進歩主義教育運動の農本主義的側面－」千葉：千葉大学教育学部研究紀要 (18), 1969. 3-55.
- 木内信胤・市橋靖子『アメリカ農業の研究』東京：世界経済調査会 1965.
- 菊元富雄「アメリカのエクステンション・ワーク」仙台：東北大学農業経済研究報告 10巻 1969. 85-98.
- 国際子ども図書館 2018. 「ローラ・インガルス・ワイルダー賞の名称変更」2019年12月1日 <<https://www.kodomo.go.jp/info/child/2018/2018-080.html>>
- 斎藤潔『アメリカ農業を読む』東京：農林統計出版 2009.
- 佐々木保孝「コーネル大学における農業拡張の組織化」広島：『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部 第52号 2003. 69-77.
- . 「L. H. ベイリーの農業拡張論」広島：『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部 第50号 2001. 93-100.
- 農林中金総合研究所 2018. 総研レポート「農業者支援のあり方に関する調査研究（Ⅱ）－米国調査編－」2019年8月29日 <<https://www.nochuri.co.jp/>> pdf
- 田村重雄・木村慶男『世界の農業普及事業：アメリカ・ヨーロッパ中心に』東京：社団法人全国農業改良普及協会 1993.
- 長谷川義彦『アメリカ農業物語』東京：東京大学出版会 1968.
- 森岡清美「アメリカ農村社会学史研究序説」東京：成城大学文芸学部 日本常民文化紀要11巻 1-79.1985.
- 吉武昌男『アメリカ農業教育』東京：尚学社 1948.

Laura Ingalls Wilder and Rural Education: Comparison of Her Articles for the *Missouri Ruralist* with Liberty Hyde Bailey's Ideology of the Country-Life Movement

Takano Hiroko

Summary

Laura Ingalls Wilder is the author of the *Little House* books. Before she published the series, she wrote articles for the farm paper, the *Missouri Ruralist*, for about 13 years. Her articles included some language connected with the extension works, which were the applications of scientific research and knowledge to agricultural practices through farmer education including the home life improvement in rural communities. She not only wrote articles for the farm paper but also helped the community as secretary-treasurer at the Mansfield Farm Loan Association, and organized clubs for the farm women. All these activities were connected with the extension works. The extension works were established by Liberty Hyde Bailey who was a professor of Cornell University and they were based on the ideas of the Country-Life Movement. When we read Wilder's articles from the *Missouri Ruralist*, we notice that she had the same ideology as Bailey. Both of them worked hard for the betterment of country life, and they both thought that rural education was the key to achieve it.